

伊勢国府跡 25

2023 年 3 月

鈴鹿市

例 言

1 本書は、国庫・県費補助事業として鈴鹿市が令和4年度に実施した市内遺跡発掘調査等事業のうち、伊勢国府跡（長者屋敷遺跡第42次）調査の概要をまとめたものである。

2 発掘調査は以下の体制で実施した。

調査主体 鈴鹿市 市長 末松 則子

調査指導 石田 由紀子（独立行政法人国立文化財機構 京都国立博物館 学芸部考古兼企画室 考古室長）

小澤 毅（三重大学 人文学部 教授）

金田 章裕（京都大学 名誉教授）

和田 勝彦（財団法人 文化財虫害研究所 常務理事）

渡辺 寛（皇學館大学 名誉教授）

文化庁 文化財部 文化財第二課

三重県教育委員会事務局 社会教育・文化財保護課

三重県埋蔵文化財センター 活用支援課

亀山市 市民文化部 文化課 まちなみ文化財グループ

調査担当 鈴鹿市文化 スポーツ部 文化財課

文化財課長 山田 昭弘

副参事兼発掘調査グループリーダー 常山 隆宏

発掘調査グループ 主幹 小菅 明子

主幹 田部 剛士

再任用職員 藤原 秀樹

パートタイム会計年度任用職員 渡辺 愛子 田中 美玖

3 発掘調査を実施した場所及び面積・期間等は以下のとおりである。

鈴鹿市広瀬町字長塚 1259 番〔6AFE-A 区〕 面積 144m²

調査期間 令和5年2月15日～令和5年3月28日

4 現地調査は藤原が主体となり、測量・図化等の補助を渡辺・田中が行った。また、本書は藤原と田部が執筆し、遺構・遺物の写真撮影は田中が行った。なお、全体の編集は田部が担当した。

5 調査参加者は以下のとおりである。

〔現地調査〕 加藤忠昭・酒井新治・町野計司・吉岡健次（三重県シルバー人材センター連合会）

〔屋内整理〕 加藤利恵・永戸久美子・前出みさ子（文化財課パートタイム会計年度任用職員）

6 Fig.1 では国土地理院 2 万 5 千分の 1 地形図「鈴鹿」「亀山」の一部を、Fig.2 では国土地理院 20 万分の 1 地勢図「名古屋」の一部を加工して使用した。

7 座標は過去の調査との整合性を保つため、日本測地系第Ⅵ系を用いている。なお、図中の方位は座標北を示す。

8 本調査に係る図面・写真は全て鈴鹿市考古博物館が保管している。

9 調査及び報告書刊行にあたっては上記調査指導の個人・団体の他に、地元各位をはじめ、下記の方々のお世話になりました。記して感謝申し上げます。（順不同・敬称略）

亀山市 生活文化部 文化課 まちなみ文化財グループ・麻生 満・飯島 裕二・広瀬町自治会・鈴鹿市シルバー人材センター

目次

例言	i
目次	ii
I 遺跡の位置とこれまでの調査成果	1
II 調査の経過	2
III 発掘調査	4
1 調査の目的と方法	4
2 調査の成果	4
(1) 基本層序	4
(2) 検出遺構	4
(3) 出土遺物	5
IV まとめ	6
伊勢国府関連参考文献	7
報告書抄録	
奥付	

表目次

Tab.1 調査履歴	3
Tab.2 報告書抄録	21

図版目次

Fig.1 遺跡の位置と周辺の遺跡	8
Fig.2 伊勢国府跡周辺の主な官衙・寺院関連遺跡	8
Fig.3 調査区位置図	9
Fig.4 GAF-A区 遺構配置図	10
Fig.5 土層断面図①	11
Fig.6 土層断面図②	12
Fig.7 北方官衙 長塚南東区周辺で確認された遺構	13
Fig.8 第18-2次調査区平面図	14
Fig.9 第39次調査区平面図	15

写真図版目次

Plate 1 調査前風景（南東から）/ 検出状況（南から）	16
Plate 2 SD382 検出状況（西から）/ SD381・SD383・SX387 検出状況（北西から）	17
Plate 3 SD383 土層断面（東から）/ SD381 土層断面（南から）	
SD382 西壁土層断面（東から）/ SD382 東壁土層断面（西から）	
SD384 西壁土層断面（東から）/ SD384 東壁土層断面（西から）	
SD386 南科検出（東から）/ SD385 土層断面（北から）	18
Plate 4 出土遺物①	19
Plate 5 出土遺物②	20

1 遺跡の位置とこれまでの調査成果

史跡伊勢国府跡(長者屋敷遺跡:以下、遺跡としては「長者屋敷遺跡」)は鈴鹿川の支流である安楽川の左岸に所在する(Fig.1・2)。一帯は標高約50mの台地で、鈴鹿山脈の裾野に広がる水沢扇状地の扇端に位置する。南面に広がる谷底平野との比高差は約20mである。遺跡の北半は鈴鹿市広瀬町に、南半は西宮町に属する。また、遺跡の西側の一部は亀山市能褒野町に及んでいる。

当遺跡一帯は鈴鹿市の農業振興地域であり、水田のほか茶・サツキ苗・芝などの商品価値の高い畑が広がるほか、牛舎・豚舎および製茶施設が点在する。

瓦の出土や基壇・土塁状の高まりが各所にみられることから「矢卸長者」の伝説が伝えられる。遺跡の範囲は南北約1,300m×東西約700mと広いが、瓦など古代の遺物が散布する範囲は南北約800m・東西600mに限られる(村山1992)。

瓦散布範囲の南端中央で平成5(1993)年度に国府政庁(以下「国庁」)が確認され、その後国庁の北方で発見された建物群(北方官衙)を合わせた3地点合計73,940㎡、平成14(2002)年3月19日に伊勢国府跡として史跡に指定され、平成29年10月13日に北方官衙の一部1,409㎡が追加指定された。長者屋敷遺跡における国府関連の遺構・遺物の時期は8世紀中頃から9世紀初頭と狭い範囲に限られる。

鈴鹿川流域には古くから東西交通の要衝として多くの遺跡が残されている。古代には畿内と東国を結ぶ東海道が通っていたと考えられる。鈴鹿駅は鈴鹿関付近に、河曲駅は伊勢国分寺跡および隣接する河曲郡家(孤塚遺跡)周辺に位置したことは疑いない。古代官道の遺構としては、鈴鹿川右岸の平田遺跡で側溝芯々間が9mの道路痕跡が発見されている(林2005)。この道路遺構は奈良時代後半のものと考えられ(田部2016)、鈴鹿市国府町の伊勢国府推定地と同国分町の伊勢国分寺跡を結ぶ線上に立地する。奈良時代の一時期には亀山市関町古厓(鈴鹿駅家推定地)と伊勢国府推定地を結んで鈴鹿川右岸を通る官道が存在したのであろう。奈良時代中期頃になると、鈴鹿関が鈴鹿川の左岸に整備されるに伴い、官道も鈴鹿川左岸に付け替えられたと考えられ、長者屋敷遺跡の国府の整備もそれに伴うと考えられるが、鈴鹿川左岸の官道の実態は未だ不明である。

長者屋敷遺跡で国府政庁が確認されるまでは、鈴鹿川対岸の鈴鹿市国府町が、「国府」という地名とともに、伊勢国総社に比定されている三宅神社や府南寺といった由緒ある社寺が残ることから、伊勢国府の所在地と考えられてきた。伊勢国府推定地の範囲内においても

各所で調査が行われている。三宅神社遺跡第1次調査では奈良時代前期の大型方形井戸が検出された(新田1997)。第2次調査では整然と配置された平安時代の掘立柱建物群が(藤原1997)、第5次調査では墨書土器や斎車などの祭祀具を伴った井戸や大型の掘立柱建物群などが確認されている(林2001)。また、天王山西遺跡では施釉陶器を多く伴った掘立柱建物群が検出されている(杉立2001)。梅田遺跡では平安時代前期の集落と平安時代末期から鎌倉時代にかけての有力者の居宅が調査されている(石田2001)。また、富士遺跡では銅造遺構が検出され(田部2007)、黒色土器が多く出土した(吉田隆2008)。このように、国府地区には奈良時代前期および奈良時代後期から平安時代にかけての遺構・遺物が濃密に分布し、鈴鹿郡家および初期・後期国府が所在した可能性が極めて高いと考えられるが、官衙と決定付けられる遺構は未確認である。

長者屋敷遺跡における学術調査は昭和32(1957)年に遡る。歴史地理学的な国府研究の一環として鈴鹿市国府町で調査を行った京都大学の藤岡謙二郎らが鈴鹿川・安楽川を挟んだ対岸の長者屋敷遺跡の存在を知り、調査を行った。当時、国府町に国府城を想定していた藤岡らは、長者屋敷遺跡が初期の国府である可能性を示唆しながらも、鈴鹿関との関連から軍団跡である可能性を強調した(藤岡ほか1957)。

鈴鹿市では平成4(1992)年度から長者屋敷遺跡の学術調査を開始し、平成5(1993)年度の「矢下」地区における国庁の確認によって伊勢国府跡であるとの評価が定着した(藤原ほか1995)。国庁の北方においては「南野南」「長塚南西」「中土居南」の各区画(区画の通称はFig.3参照)において瓦葺礎石建物群(以下「北方官衙」)が発見された(新田1997・1999ほか)。

また、三重県埋蔵文化財センターによる北西域の緊急調査によって北方官衙に伴う方格地割の存在が明らかとなった(宇河1996)。調査を担当した宇河雅之は国府国庁城を含む南北6区画・東西5区画の方格地割を想定し、北端に位置する金殿を平城宮における松林苑に相当すると考えた(宇河1997)。方格地割はその後の調査で北方官衙城において区画施設が徐々に小さられる一方(吉田真2004・水橋2005・小倉2006)で、国庁以南においては「朱雀路」のみならず地割や官衙らしき遺構は全く確認されなかった(吉田真2004・水橋2005)。

平成25(2013)年度の第31次から第34次調査において宇河の方格地割案の北西部及び東部の確認調査を行ったが、いずれも区画溝等は確認されなかった。結局、方格地割で確実なものは南北大路を中心に東西4区画・

南北3区画と考えることが妥当とされた（新田2013・藤原2014・2015）。

北方官衙の北に位置する金蔵は、長者伝説の舞台として知られる。外周部の調査の結果（田部2007・2009）によれば、何らかの基壇を有する建物が存在する可能性が高いと考えられた。また、方格地割の中軸線に相当する位置で発見された幅24mの南北大路が金蔵と国片を結ぶ中軸線と一致することが確認され、三者の計画的な関連性は確実であるとされた（田部2010）。このように北方官衙は街区による整然とした区画が行われ、調査指導において単なる方格地割というより方格街区と呼ぶことがふさわしいとされた（藤原2019）。

平成27（2015）年度以降は、国片と方格街区の間での確認調査にも主体が置かれた。南北大路が北方官衙と国片の間にも延びることが確認された（藤原2018）ほか、北方官衙の南東に、「荒子東」区と呼ぶべき区画が瓦葺き建物を伴い存在することが判明するなど（藤原2016・2017・2019）の成果が得られたが、政庁の周囲では相変わらず建物等の確認にはいたらず空白域となっている。

令和元（2019）年度までで方格街区の範囲確認は一区切りとなり、令和2（2022）年度以降は若干方針を転換して、北方官衙の追加指定を念頭に未指定になっている長塚南東区を対象として建物配置の把握と遺構の遺存状況の確認に努めている。

（藤原 秀樹）

II 調査の経過

今回調査の対象とした6AFE-A区は1筆で長塚南東区の北東隅と長塚北東区の南東隅の両方にまたがる広い畑で、両者の区画施設とその間に想定される東西街路を確認するには良好な箇所といえるが、長らくよく管理された茶畑が営まれていたため調査対象とすることは困難であった（Fig.3）。

ところが、令和4年に入り今年度の調査候補地の現地確認に遺跡を訪れたところ、該当の茶畑で重機が動き茶樹が倒されているのを確認した。作業中の耕作者に状況を聴き取りしたところ、茶の営農を取りやめ当面新たな耕作の予定は無いということで、調査の是非について伺ったところ、特に支障がないという話であった。よってこれを好機として今年度の調査対象とすることにした。

令和5年2月1日に第42次調査地の賃貸借契約が締結されたが、別に進行している学術調査や緊急調査との兼ね合いから、調査に着手したのは2月15日からと

なった。2月17日に表土除去を実施し調査を開始した。3月15日には調査指導委員会による指導助言を受け、3月25日には現地公開の計画もあったが、諸般の事情により取りやめた。その後、3月24日に調査区を埋め戻し現地調査を完了した。

以下、調査日誌を抄録することで調査の経過に替える。

【調査日誌抄】

2月15日（水）晴 現地確認

2月16日（木）曇 機材搬入

2月17日（金）晴 小型重機を導入して表土除去を行う。

2月20日（月）晴 作業員4名を投入して、遺構検出を開始。

2月21日（火）晴時々雪 午前中で遺構検出完了。検出状況写真撮影。溝を確認するためサブトレンチを設定し、掘削に着手する。調査区の東端の溝SD381上面にある現代の瓦廃棄土坑から瓦が大量に出土する。文字押印互多い。

2月22日（水）晴 午前中、文化財サービス欄による基準点の設置。サブトレンチ掘削を継続する。

2月24日（金）一時雨 雨予報のため作業休み。

2月27・28日（月・火）都合により休業。

3月1日（水）晴 サブトレンチの掘削をすべて終了する。再度検出を行い、全景の写真撮影。この日をもって作業員終了。

3月2日（木）曇一時雨 午前中3mグリッドの設定を行う。午後より平面図作成開始。

3月3日（金）休業。

3月6日（月）晴 平面図作成終了。サブトレンチ断面図の作成に着手。

3月7日（火）晴 断面図作成継続。

3月8日（水）晴 断面図作成完了。

3月9日（木）晴 レベリング。現地調査終了。

3月15日（水）晴 指導会議開催。

3月20日（月）晴 指導会議にて指摘されたSD381上部の南に広がる範囲にサブトレンチを掘削。攪乱等ではなく、SD381に伴うことを確認する。平面図を訂正し、断面図を作成。西にあけておいた調査区の検出、写真撮影、平面図作成を行う。

3月28日（火）曇 重機にて埋戻作業。

（藤原 秀樹・一部、田部が改変）

Tab.1 調査履歴

回数	調査年度	調査区記号	所在地	調査期間	面積 (㎡)	調査原因	概要
プレ1次	1957	A地点	弘瀬町字南野			学術	礎石建物
		B地点	弘瀬町字下				基礎
1次	1992	長塚1	弘瀬町字長塚 1247, 1248	921110 ~ 930129	110	学術	礎石建物
		南野1	弘瀬町字南野 971		115		礎石建物
		荒子1	弘瀬町字荒子 981		110		瓦葺・溝
2次	1993	6AHF-F, 6AJA-Aほか	弘瀬町字仲起 1226・矢下 1134ほか	931129 ~ 940228	238	学術	政庁後院・東園様・軒部・東内溝・東外溝・西外溝
3次	1994	6AJA-Jほか	弘瀬町字下 1131 ~ 1133	941006 ~ 941227	750	学術	政庁正殿・西園様・西軒部・西内溝・西外溝
3・2次	1994	帆瀬調査区	弘瀬町字中土居、龜山市能登野町字中土居	940601 ~ 940817	2,700	県緊急	溝
4次	1995	6AJA-Aほか	弘瀬町字下・荒子・仲起	950920 ~ 951219	254	学術	政庁後院・北外溝・西内溝・西園様
4・2次	1995	帆瀬調査区	弘瀬町字中土居、龜山市能登野町字中土居	950605 ~ 950713	1,600	県緊急	溝
5次	1996		弘瀬町字丸内	960620 ~ 960716	133	市緊急	聖穴住居・溝
6次	1996		弘瀬町字下	960625 ~ 960719	288	市緊急	溝
7次	1996	6ACE-A	弘瀬町字南野 972.972.1.972.2.973	961007 ~ 970121	580	学術	掘立柱建物・礎石建物・溝
8次	1997	6AFB-A	弘瀬町字長塚 1279.2	971016 ~ 980210	632	学術	例地瓦・礎石建物・溝
9次	1997	A地区 B地区 C地区	弘瀬町字下 弘瀬町字下 弘瀬町字仲起	980223 ~ 980320	21 26 5	市緊急	政庁南辺部 政庁西園様 溝
10次	1998	6AFB-B	弘瀬町字長塚 1279.3.1279.5	980901 ~ 981228	1,014.2	学術	礎石建物・溝・土坑
11次	1999	6AJA-Hほか	弘瀬町字下 1176ほか	990901 ~ 000131	863	学術	溝・礎石建物・南門
12次	2000	6AHC-CEほか	弘瀬町字中起・荒子	001001 ~ 010311	1,142.8	学術	掘立柱建物・聖穴住居・溝
13次	2001	6AHD-ABほか	弘瀬町字中起 1237, 1240.1 ~ 3.1241	010920 ~ 020214	714.2	学術	溝・土坑
14次	2001	6AEC-AB	弘瀬町字中土居 1282.1	020106 ~ 020111	246	市緊急	礎石建物・溝
15次	2002	6AJD-Dほか	弘瀬町字下 1154ほか	020424 ~ 020812	1,184.1	学術	溝・土坑・古溝・土城跡
16次	2002	6AJE-Bほか	弘瀬町字下、西富田町字東起・矢野	020620 ~ 020925	3,463.4	市緊急	溝・掘立柱建物・土器散見・古墳跡・方形礎石遺構
17次	2002	6ADH-A ~ E	弘瀬町字西野 3300	020806 ~ 021130	4,640	市緊急	掘立柱建物・溝・聖穴住居
18・1次	2003	6AC-F 6AD-E 6ALE-A 6ALE-B 6ALC-C	弘瀬町字下 1126 弘瀬町字下 1144 西富田町字矢野 1015 ~ 17 西富田町字矢野 1015 ~ 17 西富田町字矢野 1015 ~ 15+16	030417 ~ 030630 030421 ~ 030630 030528 ~ 030630 030528 ~ 030630 030528 ~ 030630	243 267 21 11 48	学術	溝 溝 なし なし なし
18・2次	2003	6AEA-A	弘瀬町字中土居 1283.2	030902 ~	360	学術	溝・土坑
19次	2004	6AAD-A 6AFA-A 6ABB-A	弘瀬町字丸内 2609.1 弘瀬町字中土居 1290.1 弘瀬町字長塚 1275	040831 ~ 041118 040913 ~ 041118 040928 ~ 041118	220 200 550	学術	溝 なし 聖穴住居
20次	2005	6AAD-B	弘瀬町字丸内 2606.1 2607.1, 2608.1	050822 ~ 051130	200	学術	溝
		6AGF-A	弘瀬町南野 945.6	051011 ~ 051130	140	学術	溝
21次	2006	6ACB-A	弘瀬町字西野 3242	060719 ~ 060908	500	学術	溝・土坑
22次	2007	6ADC-A	弘瀬町字西野 3311	071001 ~ 071206	326	学術	風洞木・ビット
23次	2007	—	龜山市	—	—	市緊急	溝
24次	2008	6AEB-C	弘瀬町字中土居 1282.2	080616 ~ 080717	835	市緊急	溝・掘立柱多数
25次	2008	6ACA-A・B	弘瀬町字西野 3243・3248 番	081001 ~ 081226	690	学術	溝・礎石遺構
26次	2008	6ADC-B	弘瀬町字西野 3313の一部	081218 ~ 081226	55	学術	溝・土坑・風洞木
27次	2009	6AFA-A	弘瀬町字長塚 1244 番	090817 ~ 091216	580	学術	溝（道路側溝）・ビット・風洞木
28次	2010	6ABA-B	弘瀬町中土居 1305 番 1	101101 ~ 110131	59	学術	なし（風洞木のみ）
29次	2011	6ABA-C	弘瀬町中土居 1299 番 1	111201 ~ 130229	116	学術	なし
30次	2012	6AAE-A	弘瀬町字丸内 2612 番 1	121201 ~ 130228	81	学術	なし
31次	2013	6AAC-D	弘瀬町字丸内 2600 番 1	140122 ~ 140314	140	学術	ビット
32次	2013	6AFF-F	弘瀬町字丸内 2626 番	140218 ~ 140328	63	学術	なし
33次	2014	6AIB-C	弘瀬町字荒子 1038 番	150105 ~ 150304	61	学術	ビット
34次	2015	6AGH-C 6AIF-E	弘瀬町字南野 955 番 3 弘瀬町字荒子 985 番	160201 ~ 160315 —	132 81	学術	溝・風洞木 溝・土坑・風洞木
35次	2016	6AIF-A 6AIF-F	弘瀬町字荒子 981 番 弘瀬町字荒子 982 番	170113 ~ 170109 —	89.4 69.6	学術	溝 溝
36次	2017	6AHE-D 6AIB-D 6ARB-C	弘瀬町字中起 1234 番 弘瀬町字荒子 1039 番 中富田町字東起 1349 番	170901 ~ 171130 — —	210 149.5 75	学術	溝・ビット 溝（道路側溝）・ビット 風洞木
37次	2018	6AIA-A	弘瀬町字荒子	181213 ~ 190303	69.3	学術	溝・ビット
38次	2019	6ACG-C・D・E	西富田町字東起 1322・1323 1324 番	190712 ~ 190920	380	市緊急	聖穴住居・土坑・ビット（縄文） 土坑・溝
39次	2019	6AGD-G	弘瀬町字南野 955 番 2	191205 ~ 200228	144.2	学術	溝・風洞木
40次	2020	6AFF-B 6AFC-A 6AIA-F	弘瀬町字長塚 1248 番 1 — —	200831 ~ 201109 — —	399.04 11.69 171.15	学術	礎石建物・溝（築地）・溝・土坑・ビット・風洞木 礎石建物？・溝 溝（築地）・風洞木
41次	2021	6ARC-B・C・D	弘瀬町字長塚 1252・1254 1255 番	211115 ~ 220214	136.97	学術	溝
42次	2022	6AFE-A	弘瀬町字長塚 1259	230215 ~ 230328	144	学術	溝（築地・道路側溝）
合計					28,855.07		

III 発掘調査

1 調査の目的と方法

令和元年度の国史跡伊勢国府跡調査指導会議において、ここ数十年継続してきた北方官衙・方格街区の外周部の確認調査にある程度目処がついたことから、方格街区の史跡未指定範囲について区画施設と併せて内部の調査も実施して遺構の遺存状況を把握し、今後の追加指定につなげていくという方針が了承された。

このことに伴い、今年度の調査は方格街区のうち既に史跡指定されている南野南区・長塚南西区の間に位置しながら、未だ史跡指定を受けていない長塚南東区を対象として実施することにした。

長塚南東区では、平成4年度に第1次調査として長塚1区、令和2年度に第40次調査として6AFF-B区・6AFG-A区の発掘調査が実施されている。長塚1区では「建物規模及び礎石建物、掘立柱建物の何れかも不明であるが」「幅60cmの東西の土手状遺構と、その内部（南側）に明らかに故意に埋め込んだ黄褐色土混入黒灰色粘質土層」を検出し、「土手状の遺構は建物基礎を形成する際の周堤」と考え建物SB02（第40次調査から「SB002」と呼称）とすると報告されている。また6AFF-B区（長塚1区に一部重複）ではSB002未検出箇所と、その北東に新たにSB370が確認されている。いずれも瓦葺礎石建物であることが分かった。

これらを含め、過去の調査はいずれもひとつの街区の西半分に実施されていることが指摘されていた。官衙遺跡ということに加え、長塚南西区の南門の存在もあって、漠然と中心軸に対して左右対称な建物配置というイメージが抱かれてきたが、令和2・3年度に長塚南東区の東半にあたる6AFG-B～D区を調査した結果、単純に左右対象とならないことが確認された（藤原2021・前田2022）。また、伊勢国府跡の構造を理解するためには区画の一つずつ丁寧に調査する必要があることから、令和4年度は令和3年度の北側にあたる地点である長塚南東区の北東を確認することを目的とした。

作業は、小型重機を用いて表土耕作土を除去した後に、人力で遺構検出を行った。遺構は原則検出のみにとどめ、掘乱等により遺構の掘方の認定が困難な部分および溝の断面記録が必要な部分にのみ幅0.3m前後のサブトレンチ1～8を設定して掘削を行った。

調査区及び検出した遺構は、新たにGPS測量した基準点K1およびK2から日本測地系に基づく座標と水準高を振り込み、設定ピンを用いて平面実測した。写真は、35mmデジタル一眼レフカメラで撮影した。

（藤原 秀樹・一部、田部が改変）

2 調査の成果

(1) 基本層序

調査地の地目は畑となっているが、しばらく茶畑として利用されていた。南方・東方に向かってわずかに傾斜するものの、ほぼ平坦といってよい地形である。6AFE-A区に設定したトレンチにおいて、地表は北端で標高50.4m、南端で50.3m前後、遺構検出面（地山検出面）は概ねで標高49.6～49.7m前後を測る。

基本層序は、第1層：現在の耕作に伴う耕作土、第2層：黒色シルト層（黒ボク）、第3層：褐色シルト層（漸移層）、第4層：明黄褐色シルト（地山）となる。第1層は実際は複数に分層することができるが、有意でないため一括して捉えた。複数回にわたって耕作土が掘乱されている様子が見て取れる。

(2) 検出遺構

令和3年度の長塚南東区東半において期待された礎石建物SB370の対となる建物は掘乱が著しいため確認できなかった。また、あわせて検出が期待されていた長塚南東区の東辺の溝も確認することができなかった。そこで、その推定東辺溝の延長である地点に幅4.5m長さ32mの調査区を設定した（Fig.4）。

重機にて表土除去を行ったところ、0.3～0.4mの耕作土の下に、北端では第3層の漸移層があらわれ、北から19m辺りから南にはさらに第2層の黒ボクが確認された。ただし、南から7mまでの範囲は検出面よりも掘乱が深く入り込み、検出面では黒ボク自体が失われていた。そのため、調査区の東端に南北方向の黒ボクが溝状にのび、途中で西へおれているように見えた。そのため、サブトレンチ掘削以前にSD378の番号を与えていたが、上下関係が逆であり、当初理解したような溝SD378とはならないため、この番号は棄却した。

サブトレンチ等を入れて最終的に確認できた遺構は、溝5条と瓦の廃棄土坑1基、風倒木痕2ヶ所程度である（Fig.5・6）。以下、その内容について記述する。

①溝SD381/383

調査区の北西隅で検出した溝である。南北方向のびる溝が90度西へ折れているため、南北方向の部分をSD381、東西方向の溝をSD383とした。

SD381は幅2.5m後で、検出面からの深さは0.5mほどある。東側の肩は比較的急斜度で立ち上がるが、西側の肩はなだらかである。土層断面の観察の結果、東側から黄褐色の粒子を含む層が流れ込んできており、東に築地塀等の施設があったことを類推させる。サブトレンチ1を掘削したところ、出土量は少ないものの瓦が出

土した。

SD383は幅1.8m、深さ0.5mほどある。SD381と同様に南側の肩は比較的急斜度に立ち上がるが、北側の肩は緩やかに立ち上がっていく。なお、築地塀等の施設を類推させるような堆積は認められず、出土遺物もほとんどなかった。

このSD381・383は北方官衙「長塚北東」区画を構成する内溝の南東隅に該当すると考えられる。

②溝SD382

調査区の北側で検出した東西方向の溝である。幅2.4m、深さは0.7～0.8mあり深い。調査区の東西両端にのびているため全長は不明だが、調査区内いっばいの5m弱を検出した。調査区の西壁沿いにサブトレンチ2を、同東壁側にサブトレンチ7を掘削した。

西壁沿いでは観察されなかったが、東壁では北側から黄褐色土の流れ込みが確認されていることから、築地塀等の施設が類推される。出土遺物は少ないが、瓦が出土している。

このSD382は「長塚南東」と「長塚北東」との区画の間に想定される東西道路の北側溝だと考えられる。

③廃棄土坑SX387

調査区の北隅で、SD381の埋土を切り込む土坑を検出した。埋土はあまりしまりのない黒灰色シルト層である。直径1～1.5m前後の不整形円形を呈し、深さは0.25mほどあるが、瓦が大量に出土していることから廃棄土坑だと考えられる。新しい遺物が混入していないため、どの時期まで降ってくるのかは不明であるが、周辺の瓦を一括投棄したものだろう。

検出とサブトレンチ1の範囲を掘削しただけであるが、土嚢袋に10袋の出土量があった。全てが平瓦と丸瓦のみで軒瓦は確認できていないものの、中には「天」や「水」、「大」、「宿」、「前」、「手」もしくは「キ」等の押印瓦が認められた。判読不明なものを含めると、現状で33点が確認されている。

④溝SD380

調査区の北寄りで検出した東西方向の溝である。幅0.3mと細いが、断面形状は逆台形としっかりとしたものである。他の溝よりも南にふれていることから、古代まで遡るような溝ではないと考えている。

埋土は黒色シルトの単層であるが、出土遺物は上面検出中に瓦が出土したのみである。

⑤溝SD384

調査区の南側で検出した、東西方向の溝である。幅2～2.4m前後で、深さは0.7～0.8mあり深い。調査区の東西両端にのびているため全長は不明だが、調査区内いっばいの5m弱を検出した。調査区の西壁沿いにサブトレンチ4を、同東壁側にサブトレンチ6を掘削した。

西壁側では掘削が著しかったが黒ボクや漸移層を切つて溝が掘り込まれていることが確認できた。東壁側では、南側から黄褐色土の流れ込みが確認されていることから、築地塀等の施設が類推される。

このSD384は「長塚南東」と「長塚北東」との区画の間に想定される東西道路の南側溝だと考えられる。

⑥溝SD385/386

調査区の南端で検出した。南北のつながりをきちんと確認したわけではないが、これまでの調査成果を鑑みて南北方向のSD385が西へ90度折れ曲がりSD386に繋がるものと考えている。

SD385の幅は2.1mで、深さは0.5mある。上部を攪乱されているものの、断面形状は整った逆台形を呈する。東側から黄褐色土の流れ込みが確認されていることから、東に築地塀等の施設が類推できる。

SD386は掘削を行っていないため詳細は不明である。内（南西）側のコーナーがSD385と直交していないが、溝の肩が崩落した等のためだと考えられる。反対の外側のラインは溝SD385と直交する。

このSD385・386は北方官衙「長塚南東」区画を構成する内溝の北東隅に該当すると考えられる。

(3) 出土遺物

出土遺物はコンテナケース（55×33×10cm）に15箱分が出土した。大部分は瓦廃棄土坑SX387からの出土であった。他の溝はサブトレンチを掘削しただけであるので一概に言えないが、掘削土量の割りに遺物は少ないといえる。

SX387から出土した遺物は瓦のみであった。現在整理中であるが、ほぼ平瓦と丸瓦で占められ、軒瓦は確認できていない。これらの中には33点の押印瓦が確認されている。「宿」が可能性のあるものを含め5点と最多で、「前」が3点あるほかは「天」、「水」、「大」、「手」もしくは「キ」が各2点ある。17点が判読不明のものである。

なお、瓦以外の遺物としては、SD384とSD386から土師器の薄片が各1点出土しているだけである。

(田部 剛士)

IV まとめ

令和2年度以降は長塚南東区において国府の構造理解のための調査を続けてきたが、第42次調査は北方官衙方格街区の長塚南東区から同北東区にかけての範囲を調査の対象とした。

その結果、ほぼ想定された位置で溝SD385・386の区画内溝とSD384の同外溝が検出できた。このライン上はこれまであまり発掘調査したことがなく、平成15(2003)年に実施した第18・2次調査(「仲土居南区」)のみであった。その際には、西辺から東に30m(1区画の3分の1)までの溝が確認されたもののそれ以东では検出できずにいた。今回は、その東西溝SD257・258の終点から東に350mほど離れた地点にあたるが、ここでも東西溝が施工されていることが明らかとなった。このことから、長塚南東区から仲土居南にかけてある程度計画をもって道路が施工されていた可能性が高くなった。

また、北側の長塚北東区を区画する溝も確認できる可能性を想定して調査区を設け調査した結果、それらに該当するであろう内溝SD381・383と外溝SD382を確認することができた。ただし、これらは想定された位置よりも3mほど北へずれた位置で検出された。

これまで、このライン上で発掘調査によって明確に確認された事例がなかったため、他の地割のあり方から漠然と12m幅の道路が想定されてきた経緯があるが、今回の調査によって、この東西道路は幅が15mであると

想定させる結果となった。

第18・2次調査では、北方官衙の西辺であるSD255が検出されているが、その区画溝の下位に土坑SK259が検出されている(Fig.8)。この土坑SK259は「方格地割の西限である可能性の高い区画溝の中心線の真下で、南北区画間のほぼ真中にあたることなどからすれば、方格地割を設定するときの基準のようなものではないかとの推測も可能である」とされている(水橋2004)。この時に「ほぼ真中」とされたのは幅12mの道路を想定した場合であって、道路幅が15mであればまさに「ちょうど真中」となる。このことから左記の基準の想定も説得性のあるものであり、道路幅が15mである根拠の一つとなりえる。なお、その基準土坑SK259の対と想定される位置を令和元年度に第39次調査として実施している(Fig.9)。ただし、残念ながら、その場所まで調査区が及んでいない(コンクリートを打設し駐車場として利用している範囲の下に相当すると考えられる)。

さて、第42次調査の最大の成果は、これまで想定されてきた方格街区のあり方が変更される点である。発掘調査をはじめから30年経った現在でも、未解明な点がまだまだ多いことを思い知らされる結果であった。現在は、方格街区の南側の1列を中心に調査を進めている所であるが、真中の列や北の列についてはほとんど手がついていない。一足飛びでは不可能であるので、今後一つずつ発掘調査を進め、丁寧に伊勢国府の構造を理解していく必要がある。

(田部 剛士)

【伊勢国府関連参考文献】

- 浅尾悟 1993『伊勢国分寺跡（5次）長者屋敷遺跡（1次）』鈴鹿市教育委員会
- 石田浩司・杉立正徳・林和範 2001『盤整盤促進事業（担い手育成型）国府南部地区に伴う埋蔵文化財発掘調査 天王山西遺跡 三宅神社遺跡 梅田遺跡』鈴鹿市教育委員会
- 宇河雅之 1996『長者屋敷遺跡』『長者屋敷遺跡・峯城跡・中富田西浦遺跡』三重県埋蔵文化財センター
- 宇河雅之 1997『伊勢国府の方格地割』『研究紀要』第6号 三重県埋蔵文化財センター
- 小倉整 2006『伊勢国府跡 8』鈴鹿市考古博物館
- 杉立正徳 1997『長者屋敷遺跡（第5次）発掘調査報告』『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報Ⅳ』鈴鹿市教育委員会
- 杉立正徳 1997『長者屋敷遺跡（第6次）発掘調査報告』『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報Ⅳ』鈴鹿市教育委員会
- 鈴鹿市考古博物館 2002『伊勢国府跡史跡指定ミニシンポジウム 近畿・東海の国府 発表要旨集』鈴鹿市考古博物館
- 田部剛士 2007『富士遺跡（第2次）』『鈴鹿市考古博物館年報』第9号 鈴鹿市考古博物館
- 田部剛士 2007『伊勢国府跡 9』鈴鹿市考古博物館
- 田部剛士 2009『伊勢国府跡 11』鈴鹿市考古博物館
- 田部剛士 2010『伊勢国府跡 12』鈴鹿市考古博物館
- 田部剛士 2011『伊勢国府跡 13』鈴鹿市考古博物館
- 田部剛士 2016『平田遺跡』鈴鹿市考古博物館
- 辻公剛 1996『国府政庁の規格性～近江国・伊勢国について～』『鈴鹿市埋蔵文化財年報』Ⅲ 鈴鹿市教育委員会
- 新田剛 1997『三宅神社遺跡』『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』鈴鹿市教育委員会
- 新田剛 1994『伊勢国分寺・国府跡―長者屋敷遺跡ほか発掘調査事業報告』鈴鹿市教育委員会
- 新田剛ほか 1996『伊勢国分寺・国府跡』3 鈴鹿市教育委員会
- 新田剛ほか 1997『伊勢国分寺・国府跡』4 鈴鹿市教育委員会
- 新田剛 1998『長者屋敷遺跡発掘調査概要（9次）』『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報Ⅴ』鈴鹿市教育委員会
- 新田剛 1999『伊勢国府跡』鈴鹿市教育委員会
- 新田剛 2000『伊勢国府跡 2』鈴鹿市教育委員会
- 新田剛 2001『伊勢国府跡 3』鈴鹿市教育委員会
- 新田剛 2002『伊勢国府跡』『伊勢国府跡史跡指定記念ミニシンポジウム 近畿・東海の国府 発表要旨集』鈴鹿市考古博物館
- 新田剛 2004『付論・伊勢国府・国分寺系文字瓦』『企画展 文字瓦を考える』鈴鹿市考古博物館
- 新田剛 2004『伊勢国府とその周辺の重圓文軒丸瓦考 - 伊勢国府・鈴鹿間・鈴鹿駅家・河内間を考えるための覚書 -』『かにかく』三出版
- 新田剛 2006『伊勢国府跡と大角遺跡における重圓文軒丸瓦』『考古学雑誌』90-3
- 新田剛 2011『伊勢国府の成立』『古代文化』第63巻第3号 財団法人古代学協会
- 新田剛 2011『伊勢国府・国分寺跡』同成社
- 新田剛 2012『伊勢国府跡 14』鈴鹿市考古博物館
- 新田剛 2013『伊勢国府跡 15』鈴鹿市考古博物館

- 新田剛 2014『伊勢国府と関連遺構』『駒澤考古』39
- 新田剛 2014『東海地方の重圓文系軒瓦』『古代瓦研究』6 大宮大寺寺・興福寺寺・鴻巣館式軒瓦の展開 奈良文化財研究所
- 新田剛 2015『東海道 伊勢』『古代の都市と桑里』桑里制・古代都市研究会 吉川弘文館
- 新田剛 2018『東海地方西部の一本づくり・一枚づくり伊勢国府国分寺の所要瓦を中心として』『第18回シンポジウム 8世紀の瓦づくりⅧ―一本づくり・一枚づくりの展開Ⅰ-発表要旨』奈良文化財研究所
- 新田剛 2020『伊勢国府 国府と方格地割』『季刊考古学』152 雄山閣
- 新田剛 2020『伊勢国府跡における平瓦一枚づくりの製作痕』『生産の考古学Ⅲ』駒澤大学考古学研究室
- 林和範 2006『平田遺跡（5次）』『鈴鹿市考古博物館年報』第7号 鈴鹿市考古博物館
- 藤岡謙二郎・西村睦男 1957『歴史地理的にみた鈴鹿市廣瀬台地の初期歴史時代遺跡群 - 軍陣跡の問題と附近の開発をめぐって -』『史迹と美術』第279号
- 藤原秀樹 1997『三宅神社遺跡（第2次）』『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』鈴鹿市教育委員会
- 藤原秀樹ほか 1995『伊勢国分寺・国府跡 2』鈴鹿市教育委員会
- 藤原秀樹 2014『伊勢国府跡 16』鈴鹿市考古博物館
- 藤原秀樹 2015『伊勢国府跡 17』鈴鹿市考古博物館
- 藤原秀樹 2016『伊勢国府跡 18』鈴鹿市考古博物館
- 藤原秀樹 2017『伊勢国府跡 19』鈴鹿市
- 藤原秀樹 2018『伊勢国府跡 20』鈴鹿市
- 藤原秀樹 2019『伊勢国府跡 21』鈴鹿市
- 藤原秀樹 2020『伊勢国府跡 22』鈴鹿市
- 藤原秀樹 2021『伊勢国府跡 23』鈴鹿市
- 前田有記 2022『伊勢国府跡 24』鈴鹿市
- 水野福松 1907『高津瀬村誌』
- 水橋公恵 2005『伊勢国府跡 6』鈴鹿市考古博物館
- 水橋公恵 2005『伊勢国府跡 7』鈴鹿市考古博物館
- 村山邦彦 1992『鈴鹿市広瀬長者屋敷遺跡の研究』『古代学研究』128号 古代学研究会
- 吉田隆史 2009『富士遺跡（第3次）』『鈴鹿市考古博物館年報』第11号 鈴鹿市考古博物館
- 吉田真由美 2002『伊勢国府跡 4』鈴鹿市教育委員会
- 吉田真由美 2003『伊勢国府跡 5』鈴鹿市教育委員会
- 吉田真由美 2004『伊勢国府（17次）』『鈴鹿市考古博物館年報』第5号 鈴鹿市考古博物館
- 吉田真由美 2017『特別展 道でつながる古代の役所』鈴鹿市考古博物館

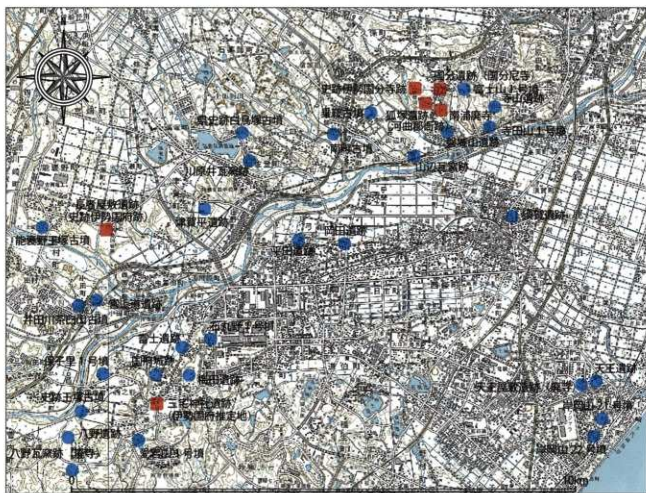


Fig.1 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1:75,000)



Fig.2 伊勢国府跡周辺の主な官衙・寺院関連遺跡 (1:200,000)

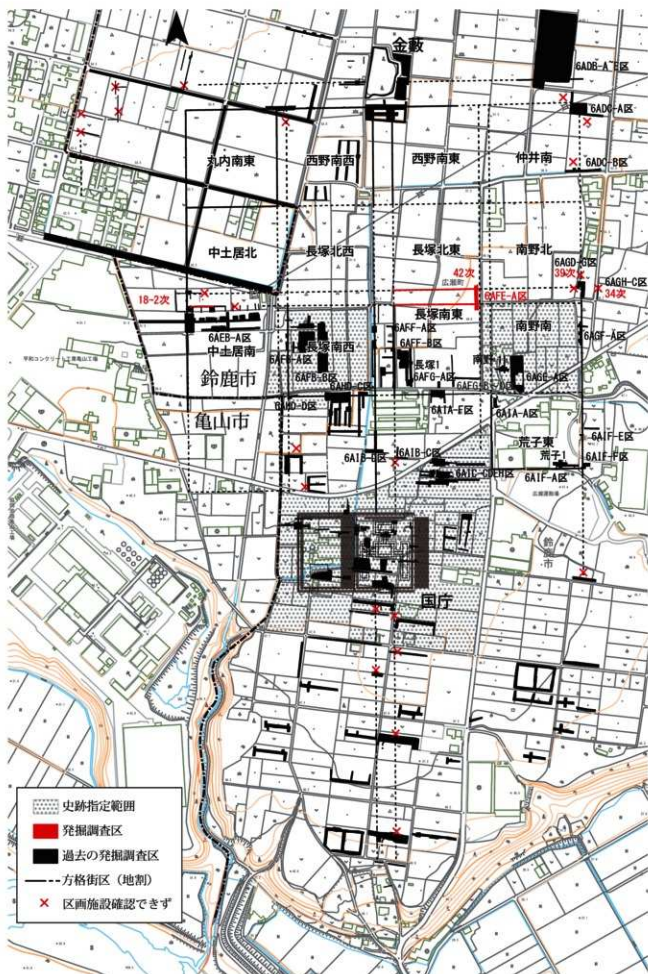


Fig.3 調査区位置図 (S=1:5,000)

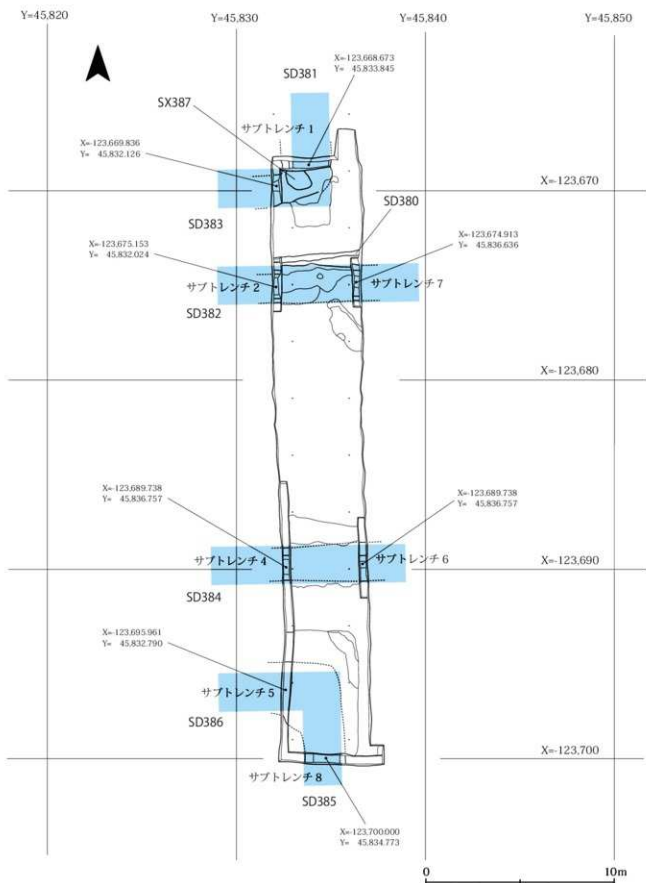


Fig.4 6AFE-A 区 遺構配置図 (S=1:200)

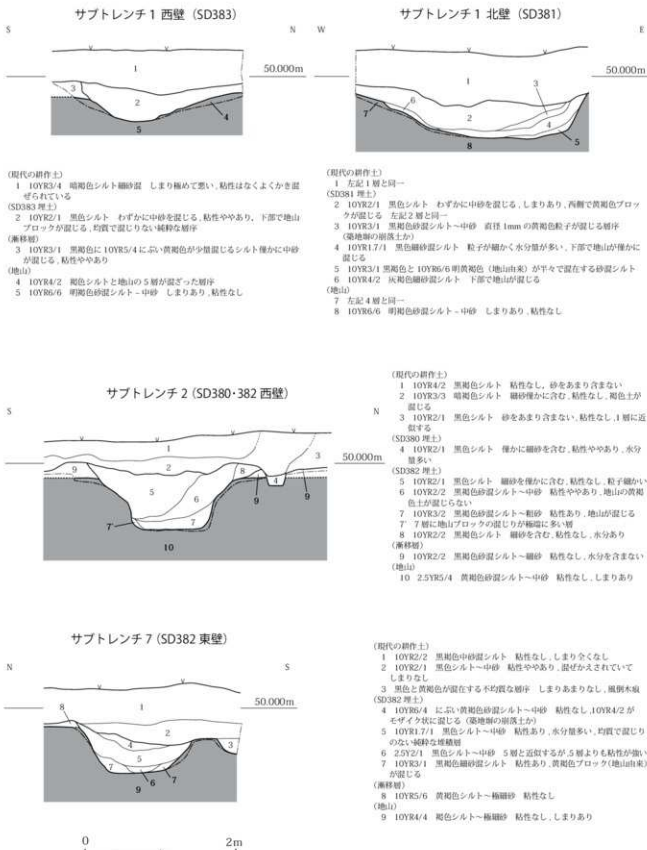
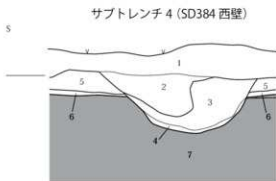
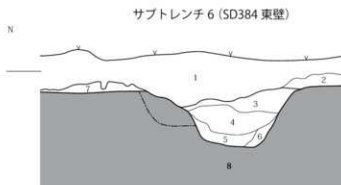


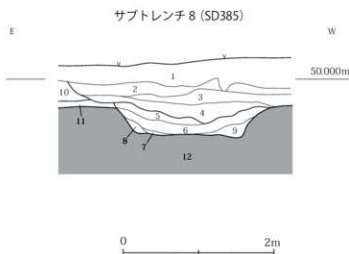
Fig.5 土層断面図① (S=1:50)



- (現代の耕作土)
- 1 IOYR3/2 黒褐色砂混シルト～中砂 粘性なし、しまりなし
 - 2 IOYR2/2 黒褐色細砂～細砂混シルト 中砂を含む、直径 2～4cm の礫を含む
- (SD384 埋土)
- 3 IOYR2/1 黒色シルト～中砂 上面に直径 2cm の礫を含む、土層は幾層されているかもしれない
 - 4 IOYR5/4 にぶい黄褐色シルト～細砂 粘性あり、地山と3層が混在した層序
- (黒ボク)
- 5 IOYR1.7/1 黒色細砂混シルト 粘性なし、中砂や直径 2～3cm の礫を含む、均質
- (漸移層)
- 6 IOYR4/4 暗褐色シルト～中砂 粘性なし、しまりあり
- (地山)
- 7 IOYR6/6 明褐色細砂～中砂 しまりあり、粘性なし



- (現代の耕作土)
- 1 IOYR2/2 黒褐色細砂～細砂 しまりなし
 - 2 IOYR2/2 黒褐色細砂～細砂 中砂を含む、水分が少ない
- (SD384 埋土)
- 3 IOYR2/1 黒色細～中砂混シルト 粘性なし、しまりあり、海側から黄褐色土が混入する(築地側の崩壊土か)
 - 4 IOYR1.7/1 黒色細～中砂混シルト 粘性ややあり、直径 2～4cm の礫を含むが均質
 - 5 IOYR3/1 黒褐色細～中砂混シルト 粘性あり、黄褐色土を少量含む
 - 6 IOYR4/6 にぶい黄褐色シルト～中砂 粘性なし、黒褐色土が斜方向に層状に入る
- (漸移層)
- 7 IOYR4/3 にぶい黄褐色細砂～中砂 しまりあり
- (地山)
- 8 IOYR6/6 明褐色細砂～中砂 しまりあり、粘性なし



- (現代の耕作土)
- 1 IOYR3/1 黒褐色細砂～中砂 しまりなし
 - 2 IOYR3/2 黒褐色細～細砂 しまりなし
 - 3 IOYR2/3 黒褐色細砂～細砂 中砂混じる、しまりあり
 - 4 IOYR1.7/1 黒色中砂混シルト 黄褐色土がブロック状に入る、直径 2cm の礫が混じる
- (SD385 埋土)
- 5 IOYR3/1 黒褐色細砂混シルト 黄褐色土がモザイク状に混じる(築地側の崩壊土か)
 - 6 IOYR2/2 黒褐色中砂混 均質で混じりない純粋な層序、4層との境界面に直径 2cm の礫を含む
 - 7 IOYR3/1 黒褐色細砂混シルト 粘性なし、水分が多い
 - 8 IOYR3/2 黒褐色中砂混シルト 粘性なし、しまりあり、黄褐色土(地山由来)が帯状に入る
 - 9 IOYR3/2 黒褐色細砂混シルト 粘性なし、黄褐色土(地山由来)が僅かに混じる
- (黒ボク)
- 10 IOYR2/2 黒褐色細砂混シルト しまりはないが均質、直径 2～3cm の礫を含む
- (漸移層)
- 11 IOYR4/4 暗褐色砂混シルト 直径 2～3cm の礫を含む
- (地山)
- 12 IOYR3/3 黄褐色砂混シルト～中砂 粘性なし、しまりあり

Fig.6 土層断面図② (S=1:50)

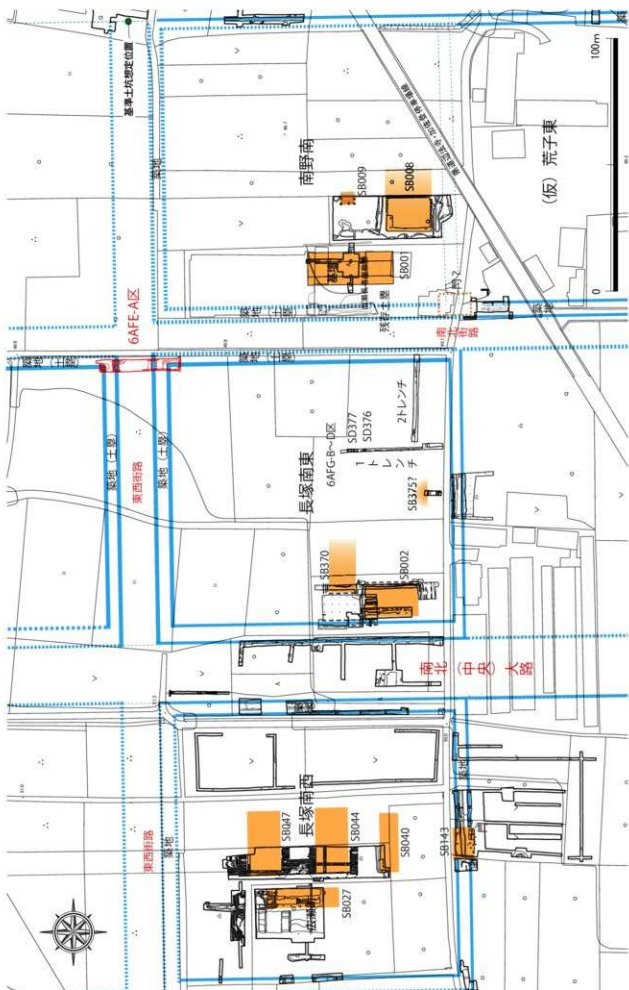


Fig.7 北方官衙 長塚南東区周辺で確認された遺構 (S=1:1500)

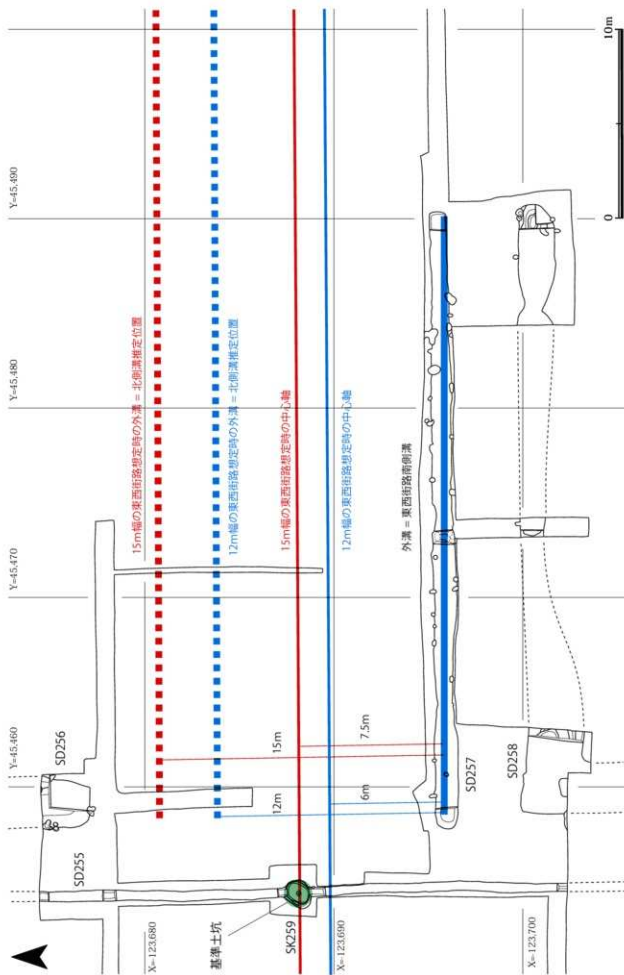


Fig.8 第 18-2 次調査区平面図 (S=1:200)

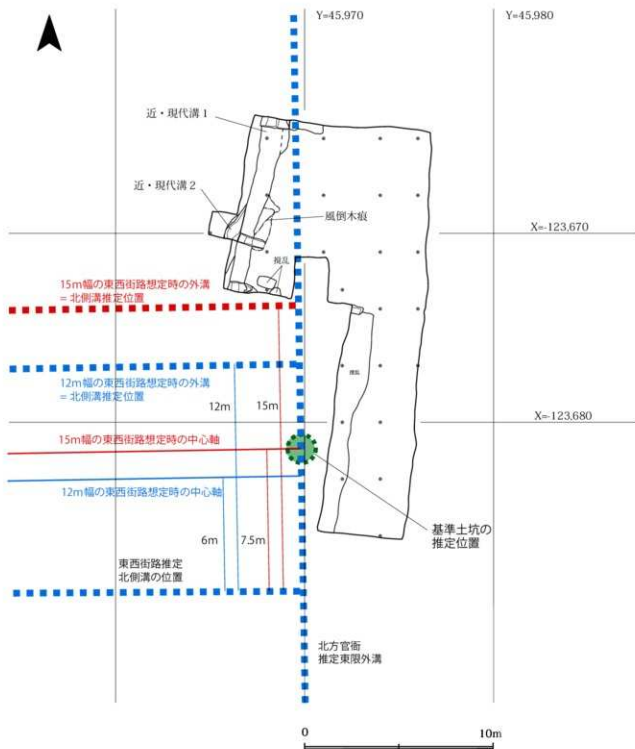


Fig.9 第39次調査区平面図 (S=1:200)



調査前風景（南東から）



検出状況（南から）



SD382 検出状況（西から）



SD381・SD383・SX387 検出状況（北西から）

Plate 3



SD383 土層断面（東から）



SD381 土層断面（南から）



SD382 西壁土層断面（東から）



SD382 東壁土層断面（西から）



SD384 西壁土層断面（東から）



SD384 東壁土層断面（西から）



SD386 南肩検出（東から）



SD385 土層断面（北から）



出土遺物①



押印瓦「前」



押印瓦「宿」



押印瓦「天」

押印瓦「大」



押印瓦「水」

押印瓦「手」もしくは「キ」か

出土遺物②

Tab.2

報 告 書 抄 録

ふりがな	いせこくふあと にじゅうご							
書 名	伊勢国府跡 25							
副 書 名								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	藤原 秀樹・田部 剛士							
編集機関	鈴鹿市 文化スポーツ部文化財課							
所 在 地	〒 513-0013 三重県鈴鹿市国分町 2 2 4 番地 鈴鹿市考古博物館内 TEL.059 (374) 1994							
発行年月日	2023 年 3 月 31 日							
所収遺跡名	所 在 地	コード		北緯	東経	発掘期間	調査面積	発掘原因
伊勢国府跡 (長者屋敷遺跡) 第 42 次	鈴鹿市広瀬町 字長塚 1259	24207	363	34° 88' 72"	136° 49' 85"	2023 年 2 月 15 日 ～ 2023 年 3 月 28 日	144㎡	学術調査
	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
	官衙	奈良・平安	溝 (道路・築地) 瓦廃棄土坑 風倒木痕	平瓦・丸瓦 (文字押印瓦を含む)			長塚南東区北東隅および長塚北東区南東隅の築地側溝を検出。両者の間の東西街路の幅はおおよそ 15m を測る。	

伊勢国府跡 25

発行日	令和5（2023）年3月31日
編集・発行	鈴鹿市 文化スポーツ部 文化財課 発掘調査グループ 〒513-0013 三重県鈴鹿市国分町2-2-4 番地 鈴鹿市考古博物館内 TEL 059（374）1994 FAX 059（374）0986 E-mail : bunkazai@city.suzuka.lg.jp
印刷	株式会社 三ツ星

Ise Kokufu Site

Preliminary Report No.25

March, 2023

Suzuka City